書評

『西鶴論序説』

水田　潤著

野田寿雄

日本文学史上井原西鶴はあまりにも有名であるが、有名な割にその総体的な本質論というものが少ない。一九六八年ユネスコによって紫式部や夏目漱石とともに世界の文豪に数えられた西鶴ではあるけれども、それでは西鶴は果たしてどのような作家であったということになると、おそらくまだはっきりと答えられる研究者は数少ないであろう。恥しいけれど、それが現実なのである。

近時西鶴研究の論考も数多いけれども、その多くは瑣末的な論証であって、たとえば作品の成立年代とか作品構成の前後関係、代筆問題、典拠との比較、文章表現等々、一つ一つの完証が決して意味の無いことはないにしても、何か巨視的な観点が欠けた感がするのはやむを得ない。研究が細かくなったと言えばそれまでであろうけれども、それだけ西鶴全体に迫ろうとする気迫の薄いのは残念である。戦前片岡良一氏の『井原西鶴』、戦後暉峻康隆氏の『西鶴――評論と研究』が出て、ともに西鶴の全体像に迫ろうとする気迫が見られたけれども、それ以後あまり見られないと言っても過言ではないだろう。

このたび水田氏の『西鶴論序説』が上梓されたとき、私がまず感じたのは、西鶴全体に迫ろうとするその気迫であった。「序説」と卑下しているが、決して普通に言う序説の生半可なものではなく、克明に西鶴のスタイル、方法、姿勢、発想を掘り起して、筋の通った論を展開しているのは、まったく氏の西鶴そのものに体当りをしている気迫の故なのである。それはまさに、全体的西鶴論の少ない現在においても称すべく、また一方では危険な作業を伴う困難な論考であったと言ってよい。

氏の論考の基盤は、まずその「はしがき」にあるように従来の思いつきに似た西鶴評価の否定にある。たとえば「西鶴諸国はなし」中の「忍び扇の長哥」が封建道徳への反逆や抵抗として意味づけられたことに、疑問を呈する。同じようなことは、本文中の各章に見られ、当然ではあるが暉峻氏の『西鶴――評論と研究』などの観点や評価に対して、いくつかの疑問を呈するのである。挙げてみれば、「本朝二十不孝」の「リアリスト西鶴」、「好色一代女」の「命をぢかに見詰め」た美女の描写、「矢数俳諧」の「非芸術性」、「好色一代男」の吉野の「おほらかに生きるその精神美」、「好色五人女」の「抵抗と悲哀の精神」、「西鶴諸国はなし」の「プリミティブな創作態度」、「日本永代蔵」の「上昇期資本主義時代の致富の種々相」、「西鶴置土産」の「不可避な死にもとづく終末観」などの指摘や評価について、果たしてそう言えるかという疑惑を述べている。しかしこの疑惑は、決して無根拠で述べられているわけではない。氏の二十数年にわたる冷静な細密な分

析と追求の帰結による判定であって、共感を禁じ得ない点も多々あるのである。

氏によれば、「好色一代男の価値は、むしろ延宝天和の具体的現実から離れ、あるいはそれを否定し、文学の世界に普遍的な人間回帰を志向し、それを創造表現しようとしたことにある」とする。しかしそれだけでは絶対の価値基準とはならない。むしろ列伝的な既存の遊女を西鶴がどのように証明しているかにかかっている。その点から見れば、「好色一代男」の名妓たちが大衆の遊女理想化の志向と結合していることに注意すべきで、ある意味では大衆との妥協だとする。しかしその限界にかかわらず、彼が女性美の典型を創造したことは確かで、そこに伝承や中世美学からの脱出があったとしているのは肯綮に値しよう。確かにここには名妓の「商品価値」としての理想が描かれており、そういうスタイルがときに美の具体的表現に限定を与えることは事実であるが、だからといって「名女情くらべ」や「恋慕水鏡」のようなたんなる名妓礼賛の平盤な叙述に陥っているわけではない。むしろ吉野にしても初音にしても、あるいは夕霧・三笠・小紫・野風にしても、遊女という苛酷な条件下での生身の人間が描かれているところがおもしろいのであって、そういう矛盾を摘発した西鶴の状況認識こそが「好色一代男」の効果ともいうべきであろう。すなわちこれをたんに「精神美」と考えるのも楽天に過ぎるが、一方にこれをたんに「遊女美」とのみ言い切ってしまうことにも問題がある。水田氏の言うように「伝承への回帰と伝承からの脱出との矛盾の中に形成された」ものが「好色一代男」であるとすれば、もちろん回帰と脱出の両面から見てゆく必要があり、回帰のみに、あるいは脱出のみに力点を置くことが、従来の過少評価、また過大評価の分れ目になったことは明らかである。水田氏の論は穏当と思うが、従来の過大評価への訂正に急であったために、多少過少評価に傾いた感も無きにしもあらずである。もちろんこれを大衆の志向、またはスタイルとして片付けることは容易であるが、それだけでは西鶴の叙述の革新性を究明することにはならないと思う。氏の大衆志向論、スタイル論は、西鶴の全作品の考察に響いているけれども、いつもその点で何かが残されてしまうのは残念である。

「好色五人女」論についても、新鮮な論証には敬意と賛同を感じる。この作がたんなる「抵抗と悲哀の精神」をうたった作品ではなく、「好色」とその風俗の説話化にあったとする観点は、穏当で説得力を持つ。この観点からすれば、一つ一つの説話の中での脱線や矛盾は充分に解決される。たとえば樽屋おせんの話にしても、実際の姦通事件は申訳のように最後にちょっと出てくるだけであって、大半は樽屋とおせんの恋愛ばなしである。これを余計と見るか、脱線と見るかであるかであるが、水田氏はこれを「好色五人女の属性の説話化」と見る。すなわちこの脱線部分が独立して一つの説話となっており、西鶴はそこに人間の俗を見たとする。「緊張性の欠除と世俗性との交錯は、西鶴の説話発想での原点である」という。確かにおせんの悲劇を追いかけるといっ

たモチーフでは、こういう横道部分は生れないのであって、そこに西鶴の説話スタイルを認めるのは穏当な見解と言わなければならない。しかし一歩踏みこんで、こういう説話スタイルを認めたとしても、なぜこのような説話が挿入されたかということになると、簡単に恣意的に挿入されたものだと答えることはできない。といって単純に主人公おせんに関係ある話だからといって挿入されたものでもあるまい。確かにほかのお夏・おさん・お七などの恋愛経過が悲劇に直結しているのに、この樽屋とおせんの恋愛経過は悲劇を生まないのであるから、こういう説話が入ってくることはおかしいのであるが、といってこれを姦通事件と切り離した一つの説話と言い切るのにも問題が残る。これはやはり全体としておせんの物語として扱うべきである。同じようなことに、清十郎の放蕩物語、おさんの美女ぶりのくだり、源五兵衛の男色趣味などといった「属性」の説話があるけれども、これも全体を破る異色な話ではなく、一つの効果を持つ設定であることに注目すれば、樽屋おせん恋愛物語も決してそれだけの挿話ではなく、やはり意味ある設定と考えなければならないであろう。長々とした熱烈な二人の愛が、まったく唐突に破局を来すのは不自然な観があるけれども、その矛盾のような破局の悲劇的効果はその長々しい恋物語の伏線からも生れるのであって、余計だと簡単に突きはなすわけにも行かないのである。もちろん西鶴は「されば一切の女移り気なる物にして」とか「あんな女に鼻あかせんと思ひ」などと姦通の動機を説明しているけれども、それよりも始めからの全体の効果を考慮に入れる必要があるだろう。近松の戯曲のように計算の手のこんだ伏線ではないにしても、やはり何か挿入の存在理由はあるように思われる。決してたんなる「俗」の描写ではないであろう。

紙数が無いので、水田氏の「諸国はなし」「本朝二十不孝」に触れることができないのは残念であるが、「諸国ばなし」の分析において、伝承や物語りの不条理や特殊に近世的均衡や俗的構造化を認め、そこに西鶴の生の認識を見出されたのは達見である。しかしこのこともうっかりすると過大評価に陥る危険性があるのであるが、平衡感覚ということでおさえているので破綻は無い。また「本朝二十不孝」の戯画が一つの現実批判になっており、「当世の資本主義秩序のおそれの感性化」としたことは、やはり新見である。しかしここにも氏の「俗的構図」観があらわれ、その限界を提示したのは、穏当ではあるがやや消極的考察の感も拭えない。

「日本永代蔵」について、氏はこれを「上昇期資本主義時代の致富の種々相」に対する関心ではなくて、むしろ金銭への妄執にとりつかれた人間心理のひだへの関心であったとする。つまり「長者教」的教訓が至るところで破綻しているのは、それだけ西鶴の状況への関心が強かったのであるし、また現実の状況が不定であり悲惨であったからとする。この作に繁栄と共存する極貧や崩壊が数多く描かれているのは、決して致富という教訓的な具体例を挙げようとした意図があったからではなく、むしろ逆な時代

状況の認識の故であったとするのである。これも正確な考察といえよう。「日本永代蔵」に成功者と失敗者とがほぼ同数に描かれていることは事実であるが、この失敗者をも成功者の逆例として考えるのは、この作を教訓作としてあつかうからであって、むしろ教訓がスタイルであって西鶴の本心は状況描写にあったとするならば、この矛盾は解決される。しかし一方から考えると、状況描写といっても成功者の実例がかなり誇張された形ではあっても賛美されているのは、果たしてたんなる「虚実皮膜のドラマ」でしか無かったであろうか。またはたんに「世の人心」といって済まされるものであろうか。この点私はまだ疑問を感じる。教訓が一つのスタイルであったにしても、どうして西鶴がこういうスタイルに想到したかという根本動機について、もう一歩突っこんだ考慮が欲しいと思う。

私は西鶴の「世の人心」への関心や、説話化の手法を認めるのにやぶさかではないが、一つ一つの革新的なスタイルがなぜ生れたかについて根本的な疑惑と興味とを持っている。水田氏は触れなかったが、たとえば武家物の一群のスタイルの存在も大きい。「日本永代蔵」のスタイルも、確かに大きな矛盾と破綻に充ちてはいるが、その根本にやはり「銀が銀をもうくる」資本主義停滞期の倫理確立の動機がほのめいているのではないだろうか。つまり町人の危機においてこそ町人倫理確立の必要があったのではないだろうか。同じことは遊女道の堕落において遊女の理想が説かれなければならなかったし、武士道の堕落において武士道が称揚されなければならなかったのと軌を一にする。少し言い過ぎだったかも知れないが、西鶴のそういうスタイルの模索にこそ、あるいはそういう模索の過程にこそ西鶴があったと考えるもので、その点やや水田氏と観点を異にするものかも知れない。

状況への関心が西鶴の本質であったとすれば、水田氏が「万の文反古」や「世間胸算用」の作品を高く評価されるのは、当然の帰結であると思う。ことに「万の文反古」には、西鶴の転回を認め、ここに彼の至り得た説話化の完成を見る。その分析は見事である。水田氏のこの著の中では、この「万の文反古」論が私にとって一番読み応えがあった。

水田氏のこの論考は、前にも述べたように従来の安易な西鶴論を至るところで破砕している。新鮮な西鶴論というべきである。しかしところどころで私が述べたような問題も残っていると思われるので、その点については今後ともいっしょに考えてゆきたいと思う。今後の御教示を乞う。（昭和四八年五月二五日刊　A5判　二三四ページ・索引一四ページ　二八〇〇円　桜楓社）

（のだ・ひさお　北海道大学教授）